

読み上げ式と対比した談話の 音調実現相と情意表現

—清水市方言の名詞について—

亀田裕見

キーワード 清水市方言 談話分析 読み上げ式 情意表現 文音調

要旨 音韻論的型の体系記述研究を目的とする読み上げ式調査による音調の結果と、実際の談話における音調は必ずしも同じではない。東京語と同じ体系をもつ静岡県清水市方言の名詞のアクセントについて、読み上げ式と談話における音調相の比較をし、そこに見られる上昇位置の相異や、弁別的特徴の破壊について考察した。その結果、当該方言の談話には特定の情意表現と結び付いた4種類の文音調、「標準調」「高起調」「頭高調」「遅れ上がり調」が存在していることが分かった。これらの文音調が担う表現性は、新たに生じた音調形式が在来の音調形式に対して結果的に強調性を持つという相互関係において相対的に付与されるものであると考えられる。

1. はじめに

談話における音調研究には、主として句末・文末のイントネーションを取り出す研究と⁽¹⁾、文アクセントという音調変化の連続を全体的に捉えて記述する研究がある⁽²⁾。とりわけ後者においては、記録的な記述研究が多く、その記述にしても統一的記述方法が確定しているわけではない。談話研究に進展を求めるとすれば、単に生命感のある言葉をありのままに記録するというだけでなく、談話を資料とするからこそ研究可能であるという意義を明確な形で見つけなければならない。既に山口幸洋氏⁽³⁾がアクセントチェーションとして記述を試みられているが、今後の研究においては談話の音調によって見いだされた音調特徴の対比に加えて、それが単にその方言の音調特徴であるという以上の記述も要求されてこよう。

従来から、方言音調の主たる研究であった読み上げ式調査による音韻論的型

の体系記述研究の結果と、実際の談話の音調が全く同一ではないという事実の認識はあった。しかし、具体的に実現相と型との差異がどこにどのようなようにあり、また、それがいかなる言語上の意義を担っているのかということについては、未だ明らかにされていない点が多くある。

本稿は、東京語と同じ体系をもつ静岡県清水市方言の名詞のアクセントにおいて、読み上げ式調査によって抽出した音韻論的型と、談話における実際の音調相との比較という方法で分析を行い、そこに見られる上昇位置の相異や、弁別的特徴の破壊がなぜ起こるのか、またどんな場合にどのような音調になるのかということを中心に考察した。そしてその結果として、当該方言の談話には特定の表現性を持つ4種類の文音調が存在していることを示すものである。

2. 資料について

調査地は静岡県清水市葛沢（とずらさわ）である。葛沢は清水市の興津川上流の山あいにある、お茶の栽培等の農業を営む戸数70戸程の集落である。インフォーマントはA氏（大正1年生まれ・男性・生え抜き・農業）とB氏（大正12年生まれ・男性・生え抜き・農業）の二人である。

調査は読み上げ式による1～4拍名詞683語のアクセント体系調査、1990年8月(A氏)、1992年4月(B氏)、自然談話の採集(1992年4月)⁽⁴⁾、及びその談話の中に現れた名詞の読み上げ式による型の確認調査(1993年5月)の3種からなる。

本稿の分析に用いた談話資料は、この談話のうち時間にして約50分間分を文字化したもので、その中に現れる名詞（A氏：総数820語／異なり語数416語、B氏：総数362語／異なり語数239語）を分析したものである⁽⁵⁾。

3. 読み上げ式による音調

3.1 当該方言におけるアクセント体系の確認

一般に静岡県中部の方言のアクセント体系は東京中輪式であるといわれている通り、当該方言の読み上げ式調査の結果、名詞アクセントの音韻論的型の体系は次の〔表1〕のように下り核による、東京語と同じ体系になることが確認された。

〔表1〕清水市方言における名詞の音韻論的型の体系

	1拍語	2拍語	3拍語	4拍語
④	○▷	○○▷	○○○▷	○○○○▷
③	○ ¹ ▷	○ ¹ ○▷	○ ¹ ○○▷	○ ¹ ○○○▷
②		○○ ¹ ▷	○○ ¹ ○▷	○○ ¹ ○○▷
①			○○○ ¹ ▷	○○○ ¹ ○▷
④				○○○○ ¹ ▷

〈所属語の例〉

- 1拍語 ④柄、毛、 ①木、巢、
 2拍語 ④飴、海老、 ①靴、汗、 ②石、土、
 3拍語 ④葵、額、 ①嵐、命、 ②朝日、砂糖、 ③光、刀、
 4拍語 ④鶏、友達、 ①市役所、タンポポ、 ②果物、鶯、 ③唐笠、風呂敷、 ④盃、正月、

3. 2 読み上げ式における音調相

読み上げ調査における具体的な音調相を説明する。読みあげ式の調査は次の3つの発話形式で行った。

- (i) ○○がある。(短文の初頭に置く)
- (ii) ○○ (語単独)
- (iii) この○○が (助詞付文節発話、非初頭)

一般的に下降に関しては基本的に核の位置を守って実現され、上昇に関しても東京語と同じく、(a) [○¹○···] という初頭の2拍目から高くなる形を取る。2拍目が特殊拍 /R/ /N/ /Q/ /J/ の場合も読み上げ式では同様にこの形であることが多いが、特殊拍での上昇を避けて、(b) [¹○○···] のように1拍目から上昇することもある。(以下上昇位置はa bで表す。)ここまではほぼ東京語と同じである。例として〔表2〕に(1)「葛沢」を挙げる。これは(i)~(iii)すべての発話形式において核での下降が安定している例である。しかし、当該方言の上昇下降の実現の仕方には、東京語と異なり、読み上げ調査においても下降が必ずしも核の位置どおりに現れるとは限らない場合があることを付け加えなければならない。つまり「核の位置よりも前に下降が起こることがある」ということである。

これは無核型や語末核型の語、また拍数の長い語のように、初頭から核までの拍数が多い場合に現れ易い。当然頭高型の語の場合にはこの音調は起きにくい(〔表2〕の(6)(7))。具体的音調相には、次のように①~③の変種がある(6)。

〔表2〕読み上げ式による名詞の音調傾向

凡例：i) ○○がある。ii) ○○ iii) この○○が

←) 標準形のままで注目点 →) 変形されている部分の注目点

音調傾向	例番	発話者	音韻論的型／例 (i, ii, iii)	ピッチパターン
3つの発話で 下降が核の位 位を守ってい るもの。	(1)	A	葛沢／トズラ ¹ サワ ¹ ／	
			i) ト ¹ ズラ ¹ サワ ¹ がス ¹ キ ii) ト ¹ ズラ ¹ サワ iii) コ ¹ ノトズラ ¹ サワ ¹ ガ ¹	
①初頭の1~2拍 目にすぐ下降が 起こることがあ る。読み上げ式 ではこの例は少 ない。下降の段 差が小さい。	(2)	A	宍原／シシハラ ¹ ／ (聴)	
			i) シ ¹ シ ¹ ハラガアル (A氏の読み上げ1回目) . . . ① ii) シ ¹ シ ¹ ハラガアル (A氏の読み上げ2回目) . . . 型通り	
②平板型や尾高 型は、i)ii)など その語が末尾に 置かれると、最 終拍が低くなる ことがある。	(3)	A B	高速／コーソク ¹ ／ (聴)	
			i) コ ¹ ー ¹ ソクガアル(B) . . . ① ii) コ ¹ ー ¹ ソクガトール(A) . . . 型通り	
音韻論的型が 頭高型の語の 下降位置は、 読み上げ式で は安定してい る。	(4)	A	仕事／シゴト ¹ ／	
			i) シ ¹ ゴトガアル . . . 型通り ii) シ ¹ ゴト . . . ② iii) コ ¹ ノシゴト ¹ ガ . . . ②	
	(5)	B	言葉／コトバ ¹ ／	
			i) コ ¹ トバ ¹ ガアル . . . 型通り ii) コ ¹ トバ . . . ② iii) コ ¹ ノコトバ ¹ ガ . . . 型通り	
	(6)	A	猿／サル ¹ ／	
			i) サ ¹ ルガアル ii) サ ¹ ル iii) コ ¹ ノサルガ	
	(7)	B	蕨／ワ ¹ ラビ ¹ ／	
			i) ワ ¹ ラビガアル ii) ワ ¹ ラビ iii) コ ¹ ノワ ¹ ラビガ	

① 初頭から1～2拍目にすぐ下降が起こる。核が語の後ろの方にある場合、この音調と核が共起することもある。(〔表2〕の(2)(3))

② (ii) (単独発話)や (iii) (その語が末尾に来る発話の場合)に、最終拍が低くなる。(〔表2〕の(4)(5))

③ 無核型の語に [○「○○ガ」アル] のような文節末の下降が見られる⁽⁷⁾。このような音調のメカニズムについては、音調の法則構造を十分吟味しなければならないが、本発表の主旨はそこにあるわけではない。また②③の音調は本稿でこれから考察する情意表現を担う音調とは異なった次元の音調表現であると考え、以上のように読み上げ調査における音調変種の現れ方の傾向を提示しておくに留め、考察は別稿に譲る。

4. 談話中に現れる名詞の音調傾向

では読み上げ式の調査の結果をふまえ、実際に談話中の名詞の音調がどのように実現されているかを見る。

4.1 上昇

まず、上昇に関して見ると、読み上げ調査よりも、(b) [「○○・・・」] のように1拍目から上昇することが多い。2拍目に特殊拍がある語はほとんどこの(b)で発話されしかも、2拍目が特殊拍以外の拍の場合でも(b)になることがあるためである。つまりこの1拍目から上昇する音調は単に音環境によるものから、さらに談話における特徴として何らかの機能を担っていると見ることができる。

4.2 下降

談話中での下降の実現には次の種類がある。核の位置と異なる位置で下降をするものに、前項で指摘した読み上げ式の調査に見られた2つの特徴①②のほか、核の位置より後ろで下降を実現する音調の存在が付け加わる。

(イ) 核の位置で下降を実現するもの

(ロ) 核の位置より前で初頭の1～2拍目で下降をする・・・前項の①

(ハ) 両方(イとロ)の下降をもつ

(ニ) 核の位置より後ろで下降する。

(三) 末尾の拍を低くする。・・・前項の②

さて、ここで問題にしたいのは、以上に示した音調変種が談話の音調の中で

ある種の表現性を担っているという事実である。つまり当該方言においてはいずれの音調形式を取って音調を実現するかということで、発話時における話者の情意を表現しているのである。

5. 当該方言の文音調の分類—標準調・高起調・頭高調・おくれ上がり調

音韻論的型との関係で音調の実現相を捉え、その音調パターンにある表現性が伴われるものを本稿では「文音調」と呼ぶことにする⁽⁸⁾。これは広義のイントネーションと言ってもいいものだが、例えば文末の疑問などを表すような狭義のイントネーションと区別してこう呼ぶ。またイントネーションという用語と音韻論的型の上に全く別な層として乗っているような印象があり、本稿の意図とずれがあるため、あえてこの用語を用いる。また「表現性」には情意的なものと同理的なものが考えられるが、ここでは前者の情意的表現を扱う。

まず、前項で指摘した談話から帰納される音調変種の組み合わせと、情意の対応を文音調として〔表3〕に示し、引き続きそれぞれの文音調の実例を談話から抜き出して読み上げ式調査における音調と比較しながら例示することにする。

〔表3〕文音調の分類

文音調	上昇位置	条件	下降位置※	表現情意
標準調	a [○↑○···]	2拍目が普通拍	核の位置	特になし(平静さ)
	b [↑○○···]	2拍目が特殊拍		
高起調	b [↑○○···]	2拍目が普通拍でも	核の位置	気軽さ
頭高調	b [↑○○···]	非頭高型 /··○○↑○···/	核より前	意気込み、夢中さ
		頭高型 /○↑·····/	核より後ろ	
おくれ上がり調	a [○↑○···]	2拍目が特殊拍	核の位置	呆れ、感嘆、 困惑、意外さ
		頭高型 /○↑·····/	核より後ろ	

※下降位置と3.2で示した記号との対応

[核の位置] = (イ)、[核より前] = (ロ)(ロ'), [核より後ろ] = (ハ)

この標準調・高起調・遅れ上がり調はそれぞれ、川上薬氏⁽⁹⁾が東京語において「早上がり」「並あがり」「遅上がり」といって指摘した音調に相当する表現性を持つとあってある程度は差し支えない。但し、川上氏は上昇のみを指標としている点で、上昇下降を総合的に見る本発表の立場とは異なっている。また

東京語には見られないものとして頭高調がある。

5.1 標準調

2拍目から上昇し、核の位置を忠実に守る。この文音調で発話するときには、特に情意が加わらないことを示すが、あえて次の高起調と比較すれば「落ち着き」や「平静さ」の表現といえる。2拍目が特殊拍のときは1拍目からも上昇できる。（〔表4〕の(8)(9)）

5.2 高起調

2拍目が特殊拍でもないのに1拍目から上昇するが、音韻論的型は破壊されない。この文音調では、「気軽さ」や、「話が弾んでいる心理状態」を表現している。（〔表4〕の(10)~(13)）

5.3 頭高調

初頭の1~2拍目ですぐに下降してしまう。この音調形式は「意気込み」や話に「夢中」になっている心理状態を表現している。音韻論的型を破壊してまで実現するので高起調よりかなり強い強調整を感じる。（〔表4〕の(14)~(16)）

頭高調といってもこの文音調には〔¹○○¹…〕のように2拍目まで高い音調も含む。これは早口で話している場合などに聞かれるが、要するに初頭を高くしすぐ下降すれば、それが厳密に何拍分の長さでも問題ではないということであり、音韻論的型との本質的な違いがある。（〔表4〕の(17)）

またもともと音韻論的型が頭高である語をこの頭高調で発話するときにも、核での下降をひとつ後ろへ送って、同様の〔¹○○¹…〕という音調なったり、初めの拍の音を伸ばしぎみにしたりすることで、この頭高調を標準調から際立たせている。この音調は下降に着目すれば核より後ろへ送っていることになるので、次のおくれ上がり調と紛らわしいが、上昇位置が1拍目にあり、遅れては上昇していないため頭高調の変種とみなす。（〔表4〕の(18)）

5.4 おくれ上がり調

おくれ上がり調は頭高調と同様に強調の文音調だが、頭高調の意気込み・夢中さとは対照的にむしろ感情的に1歩退いた立場で「呆れ」や「意外さ」「困惑」を表す。音調は2拍目に特殊拍がある語や頭高の語のように、本来上昇を(a)〔○¹○¹…〕で発話しないものを無理にこの形式で発話しようとするものである。その結果、下降が核の位置と異なることになる⁽¹⁰⁾。（〔表5〕の(19)~(21)）

〔表4〕 文音調の分類 — 読み上げ式発話と談話の音調比較例 —

↔標準型のままでの注目点 ←談話で变形されている所の注目点

音調	発話者	音韻論的型／ 例文(訳)／談話の文脈／〔表現される情意〕	＜ ピッチパターン ＞	
			読み上げ式	談話
標準	(8) A	<p>彌太郎／マユ¹タロー／</p> <p>読み：マ¹ユ¹タローガ¹ク¹ル</p> <p>談話：マ¹ユ¹タローッテノ¹ア¹ルダ¹ー</p> <p>(彌太郎という人がいるんだよ)</p> <p>向氏が彌太郎という人の話題で盛り上がり過ぎてきたが、訳が分からないでいる調査者に説明。〔特になし〕</p>	 マ ¹ ユ ¹ タローガ ¹ ク ¹ ル	 マ ¹ ユ ¹ タローッテノ ¹ ア ¹ ルダ ¹ ー
	(9) B	<p>人間／ニンゲン／</p> <p>読み：ニ¹ンゲンガ¹イル</p> <p>談話：「ニンゲンダ¹テオ¹キ¹ーコエ¹ン(ナルシヨ)</p> <p>(人間だって大きい声になるでしょ)</p> <p>騒がしい所では人間も声を張り上げるように、鳥も滝の首に声を張りあげるから葛城の大滝には鳴き声の良いメシロがいる。〔特になし〕</p>	 ニ ¹ ンゲンガ ¹ イル	 「ニンゲンダ ¹ テオ ¹ キ ¹ ーコエ ¹ ン
高	(10) A	<p>鐘／カネ／</p> <p>読み：カ¹ネガ¹ナル</p> <p>談話：「カネーモグ¹ルダカ (鐘へ潜るのだろうか)</p> <p>お寺の祭りでモグリで商売をする奴がいる。モグリだったって鐘へでも潜るのかねえと言ったB氏の言葉を面白がってA氏が繰り返す。〔弾み〕</p>	 カ ¹ ネガ ¹ ナル	 「カネーモグ ¹ ルダカ
	(11) A	<p>背中／セナカ／</p> <p>読み：セ¹ナカガ¹イー</p> <p>談話：「セナカノハ、ハバヒロエーナ</p> <p>(背中の幅の広いタヌキ)</p> <p>一度飼ったことのある狸は顔付きや体つきで、放した後に山で見ても分かるものなんだよと笑いながら。〔気軽さ〕</p>	 セ ¹ ナカガ ¹ イー	 セナカノハ、ハバヒロエーナ
起	(12) A	<p>仕事／シゴト／</p> <p>読み：シ¹ゴトガ¹アル</p> <p>談話：「シゴト¹シテータラ (仕事をしていたら)</p> <p>その狸とは山で仕事をしていたときに出会って、そのままついて来たのでえさをやって飼い始めたといういきさつを話す。〔弾み〕</p>	 シ ¹ ゴトガ ¹ アル	 「シゴト ¹ シテータラ
	(13) A	<p>猿泣かせ／サルナカセ／ (柿の名前)</p> <p>読み：サ¹ルナ¹カゼガ、(マ¹ズ¹イ)</p> <p>談話：「チンチロッ¹テ、¹サルナ¹カセ</p> <p>(チンチロツテ、ほら猿泣かせのこと)</p> <p>まずくて猿すら食べないという柿「猿泣かせ」(チンチロ)は、やっぱりその名のとおり動物も食べないもんだよ、という話。〔気軽さ〕</p>	 サ ¹ ルナ ¹ カゼガ	 「チンチロッ ¹ テ、 ¹ サルナ ¹ カセ
頭高調	(14) A	<p>お婆／オバー／ (年とった妻)</p> <p>読み：オ¹バーガ¹イル</p> <p>談話：「オ¹バーニキータ¹ラ (お婆に聞いたら)</p> <p>お婆(自分の妻)が伝言をしなかったお陰で大変な目にあった。お婆に聞いたらそうやそんなこと言ってたなあなんてのんきに言ったということを、少々憤慨しながらまくしたてる。〔夢中〕</p>	 オ ¹ バーガ ¹ イル	 「オ ¹ バーニキータ ¹ ラ

〔表4〕(続き) <=>標準型のままでの注目点 <->談話で変形されている所の注目点

文音調	例番号	音韻論的型/ 例文(訳)/談話の文脈/[表現される情意]	<ピッチパターン>	
			読み上げ式	談話
頭	(15)	末/スエ/(木っ)		
	B	読み:「スエガク」ル 談話:「スエツレン (木っ子の旦那が)' 東北の人の言葉はよく分からない、おれは通訳をつけてもらったことがあるというA氏の話に続けて、そう言えば末の子の嫁先先の八戸に行った時には向こうが父を使って言葉を変えてくれたと付け加える。〔夢中〕		
高	(16)	森林公園/シンリンコ ¹ ーエン/		
	A	読み:「シンリン ¹ コ ¹ ーエン 談話:「シ ¹ ンリンコ ¹ ーエンナデ (森林公園なんて) 市は力があるから、大きなことでも他要なくやっつけてしまう。あんな山の高い所に道を作ってたうえ森林公園まで作ってしまう、たいしたものだねえという。〔意気込み〕		
調	(17)	葛沢/トズラ ¹ サワ/(地)		
	A	読み:ト ¹ ズラ ¹ サワガスキ 談話:「トズ ¹ ラサワノ ¹ タメニナルカシンナー (どれほど葛沢の為になるか知れない) 葛沢の名木大桜を1地ごと市へ寄付して管理してもらい、天然記念物にでもなればきっと葛沢の為になるに違いないと主張する。〔意気込み〕		
調	(18)	清水/シ ¹ ミズ/(地)		
	A	読み:「シ ¹ ミズガアル 談話:「シ ¹ ミズアタリハナー (清水辺りでは) 清水辺りでは車がたくさん通るから福島に旅行したときも同じつもりで15分前に駅へ行ったら、1地の人は3時間前から待っているので驚いた。結局車では座れず上野まで立ちっぱなしだったという笑い話。〔夢中〕		
お	(19)	雨/ア ¹ メ/		
	B	読み:「ア ¹ メガアル 談話:「(ナ ¹ ンシロ)ア ¹ メ ¹ フルデ(かたけいけ) (なにしろ雨が降るのでかなわなかったよ) 中気で寝ていた人がじくじく通夜に行った。本人はもう随分高齢だったし仏様になったからいいけど、自分は雨に降られて困ったという。〔困惑〕		
れ	(20)	猿/サル/		
	A	読み:「サルガク」ル 談話:「サ ¹ ー ¹ ルンタケバコホル (猿が竹の子掘る?) 竹の子荒しの犯人は猿だっていうけど、それは爪のある猪の方が犯人だ。猿はどこまでも刺けるらっきょうや竹の子が苦手、すぐ怒り出すものだから、猿が掘るってことはあり得ないという話。〔不審〕		
り	(21)	ポンポン/ポンポ ¹ ン/(原動機付き自転車)		
	A	読み:「ポンポ ¹ ンガハシ」ル 談話:「ポ ¹ ンポ ¹ ンデヨクハシ」ル (原付でよく走るな) 向氏の従兄弟のは、竹の子堀に行っても竹の子を踏むまで竹の子のありがたか分からないほど目が悪いのに、それでよくもまあ原付に乗って走っているものだよと呆れる。〔呆れ〕		

6. 文音調が表現性を担うにいたる解釈

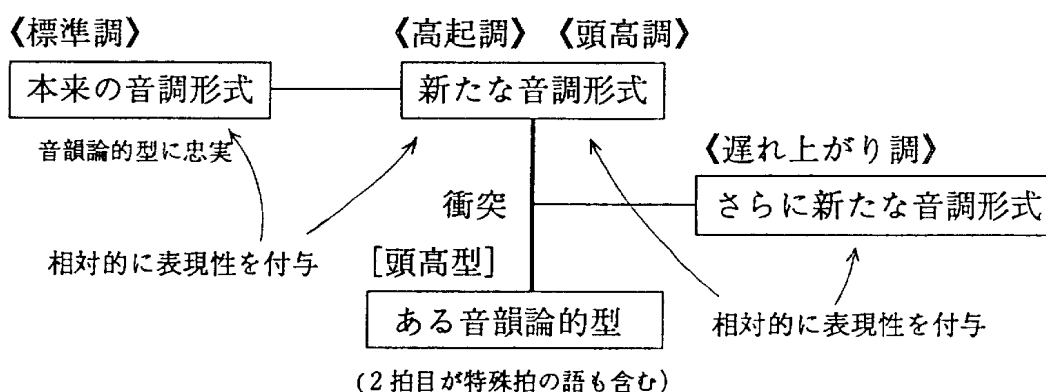
音調のもつ表現性に関しては、従来、イントネーションとして疑問・肯定・反問などを表す文末の音調が主として取り上げられて来た。しかし当該方言の談話においては以上に述べたように、音調による表現は文末に限らない。その点に着目して文頭のイントネーションを唱えたのが川上葵氏であったが、それは本稿のように下降の実現相をも含んだ定義ではなかった。東京語においては、それで十分説明ができるのだろう。しかし、当該方言には核を無視する頭高調や遅れ上がり調といった文音調が存在するために、両者を総合的に見る必要があるのである。

では音韻論的型の指標である下降の位置を変化させてしまうことのできる頭高調やおくれ上がり調といった文音調が、なぜ出現し、なぜそのような表現性を伴うのかという点が注目される。むろん、ある表現上の情意そのものが新たな音調形式を要求した結果として、種々の文音調が生まれたのではないであろう。

当該方言の4つの文音調の関係を考えてみよう。標準調と頭高調の間には、本来的には前者が存在しており、そこに新たに頭高調が生じたという前後関係が考えられる⁽¹¹⁾。なぜなら新たに生じた形式には在来の形式に対して結果的に強調性を持つことになる予想されるからである。強調性を持っているのは頭高調の方であり、これに対して相対的に標準調がニュートラルな発話として位置付けられる。高起調は両者の中間的な表現であろう。

しかし頭高調が頻繁に使用されると、本来頭高型に属する語は標準調と頭高調の区別がなくなり、強調表現としてよりはっきりした形式を求めることになる。それがおくれ上がり調である。したがって頭高調と遅れ上がり調にも前後関係が見られ、相対的に後者の方に何らかの情意表現形式として位置付けられることになる。それが具体的には「呆れ」や「困惑」といった情意の表現に利用されるようになったものであろう。また初頭を高く始めないことで「非頭高調」を表現しようという欲求に基づくこの遅れ上がり調は、音韻論的頭高型を真相としては壊すことも可能にする。

以上をまとめれば、次の図のような文音調相互の関係が想定できる。



7. おわりに

談話資料には、本稿で示して来たように文音調というレベルの音調表現が存在するという点で研究意義が見いだせると考える。とりわけ、従来の音韻論的型の抽出のみを目的とするアクセント調査に見られにくい音調、すなわち型を破壊する音調の存在を確認できるという点、及び、表現意図を読み取り文音調と表現性の対応を考察できる点で、そのほかの資料に変えがたい。とはいえ、談話の文脈から調査者が表現意図を読み取る不安は免れない。話者に後でテープを聞いてもらいそのときの情意を問う方法をとるか、或いはほかに談話の情意を客観的に測定する指標・方法がもしあるならば、更に科学的に談話の音調を分析することが可能になるであろう。

〈注〉

- 1) 国立国語研究所 1960「話しことばの文型(1)ー対話資料によるー」(『国立国語研究所報告』18)等
- 2) 藤原与一 1956「日本語方言「文アクセント」の研究ー特異な下降調を持つものについてー」(『音声の研究』8)等
- 3) 山口幸洋 1987「東京下町方言のアクセントチェーション」(『音声言語』II)等
- 4) 談話収録はA氏宅でのA氏とB氏の談話に、調査者とA氏の妻が時折加わる、自然な形で行った。談話には特にテーマを定めず、両氏に任せたため内容は多岐にわたる。例えば、豚の食べ方、旅行した話、葛沢の大桜、布沢のタケノコ祭り、山の動物達、等。
- 5) この総語数の中には、準アクセント化などで語中に上昇をしていない語(A氏204語、B氏92語)を含んでいるが、これらの語には結果的に、後述する文音調による核の位置の変形はない。これは当該方言の文音調が上昇と非常に関わりのあるものであることを示しているといえる。
- 6) ①②の音調傾向は、既に他方言においても同じものと見なせる報告がある。例えば①は筆者自身の

調査で同じ静岡県南伊豆にある(亀田 1992)ことを確認しており、静岡県春野町方言(山口 1962)にもこれに似た連続下降の音調を持つという報告がある。また②についても東北地方太平洋側の地点に報告(大西 1989など)がある。また上野善道氏のいう弘前市のアクセント(上野 1977)における無核アクセント素も機能的には同じであると考えられる。

7) ③と同様の音調は静岡県伊東市新井方言に観察されるという山口氏の報告(山口 1987)がある。

これについての考察は別稿に譲りたい。

8) しかしながら「文音調」という用語は、本稿において文という単位における音調という意味の厳密な定義を持っていない。便宜的に表現するための用語として用いる。

9) 川上 夔 1956 「文頭のイントネーション」『国語学』25

10) [表4]の(20)「猿」のような例は、或いは川上夔氏が前掲論文で言うようにアクセントの型は破壊していないと見ることもできるが、(19)の例は明らかに型を壊している。

11) 3.2 で指摘した読み上げ式における音調傾向の①は頭高調と同じ音調相であり、無核型の語に現われやすい。無核型の語には音声学的な音調が現れやすいという上野善道氏の指摘(上野 1984)があるが、これより当該方言には東京語と同じ音韻論的型の体系を持ちながら、そこに頭高を指向する音声学的な音調が、情意表現とは無関係に存在することが認められる。これが談話の中では表現性を担って、無核型以外の型の語にも現れるといえる。

〈参考文献〉

上野善道 1977 「8、日本語のアクセント」『岩波講座日本語5 音韻』

——— 1984 「新潟県村上方言のアクセント」『金田一春彦博士古稀記念論文集 第2巻
言語学編』(三省堂)

大西拓一郎 1989 「宮城県志津川町方言の名詞のアクセント—音節単位によるモーラ方言の分析—」
『国語学』158

亀田裕見 1992 「南伊豆方言における多様な音調相をもつアクセントの一解釈」
『一九九二年度日本音声学会全国大会研究発表論集』

杉藤美代子 1982 『日本語アクセントの研究』三省堂

山口幸洋 1962 「静岡県春野町方言のアクセントにみられる「くぎりの下降」について」
『音声の研究』10

——— 1987 「伊東市新井のアクセント」『音声学会会報』184